【優秀賞】

「再生可能な暮らし」と「水」

宮城県仙台二華中学校
一年　齋（さい）藤（とう）　すみれ

水は私たちの生活に欠かせないことを知っているだろうか。特に、川の水は用途が広い。まず、農業用水として利用される。私たちが普段食べているものすべては、直接的にも間接的にも川の恩恵を受けているに違いない。そして、水道水としても利用されている。川の水は手間ひまかけて浄化され、蛇口をひねればすぐに水が出る。すぐに水を使えることのありがたさは計り知れない。さらに、私たち人間を含む生物や植物などの自然を育む。川の自然はもちろんのこと、海と陸をつなぎ、陸からの栄養分を海に運ぶ。結果、海の自然も育んでいるのだ。その後、川や海の水は雨雲となり、大地に雨を降らす。「川は私たちの命の源」と言っても過言ではないだろう。

話は変わり、祖父母の家は福島県にある、自然豊かで農業が盛んな地域だ。祖父母も野菜や果物を育てている。帰省した際に振舞ってくれる新鮮な野菜や果物を私も家族も楽しみにしている。また、そこからは吾妻小富士という山が見える。山に積もった雪の形から「雪うさぎ」という名前で親しまれている。しかし、先日帰省すると、異変があった。吾妻小富士の広範囲の地表の木がなくなり、地中の土がむき出しになっていたのだ。

「あそこ、削れてるね」私は吾妻小富士を指さし、言った。母は祖父からそのことについて聞いていたらしく、あれこれ教えてくれた。私はその内容に衝撃を受けた。そもそも、山が削れていたのは、土砂崩れなどの自然災害ではなく、人によるものだった。つまり、人が木を伐採したということだ。なぜ、人は木を伐採したのか。それは、太陽光パネルを設置するためだった。

広範囲に渡って、木を伐採することには様々なデメリットがある。私がなかでも注目したのは災害の危険性だ。木の伐採による山の保水力の低下が主な原因となる、泥水の流出や土砂崩れなどが懸念されている。祖父に実際に災害は起きているのか質問した。実際に山から流れてきた土砂が田の水路や道路の下に溜まり、農業に影響を与え、祖父母や農家の方々は、大変困っているそうだ。土砂は業者が取り除いているものの、大雨が降ると、土砂崩れが起こり、川に流れてくる。土砂の混ざった川の水は当然、農業に使用することはできない。また、水が汚染されることによって、生態系が崩れたり、水道水の価格が高騰したり、最悪の場合、使えなくなったりすると私は考える。やはり、川の水は人間にも生物にも植物にも不可欠な存在だ。私は川の水を守りたいと強く思った。

さて、私が思う「再生可能」とは、人間、動物、植物、地球、誰にも負担をかけず、それぞれを切り離さず、物事を続けられることだ。「再生可能」エネルギーと言われ、世間の注目を集める太陽光。太陽光パネルを設置するため、森林を切り開き、それによって川に土砂が流れ込む。私たちの生活を支える川が汚染され、生活に影響を与える。これは私の思う「再生可能」ではない。

私はふと思った。水がないと生きていけないのは現在の私たちだけではない。大昔の人々も水がないと生きていけなかっただろう。どの時代の人々もが、次の時代の子孫のことを想って大切にしてきた「水」というバトンを私たちは受け継いでいる。だから、私たちは川の水に限らず、「水」そのものを守っていかないといけない。

私が「再生可能」な範囲で水を守る方法。それは限られている。それに、「水を守る」とは何かなんて誰にも分からない。しかし、きれいな水を守り続けることは地球共通の願いだ。そのために私は、油を下水に流さないこと、川や海、湖に行ったときはゴミを持ち帰ること、節水をすることを徹底する。いつになっても、「水を守る」というこの気持ちは忘れない。